

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名(学籍番号)	: 丸目満弓 (7149505)
学位の種類	: 博士(教育学)
学位記番号	: 甲第9号
学位授与の要件	: 大阪総合保育大学学位規程第13条
学位授与の日付	: 平成29年3月19日
学位論文タイトル	: 乳児保育における新たな保護者支援研究： 連絡帳をツールとして
論文審査委員	: 主査 大方美香(大阪総合保育大学教授・修士・(教育学)) 副査 山崎高哉(大阪総合保育大学教授・博士・(教育学)) 副査 中谷奈津子(大阪府立大学准教授・博士・(学術))

(1) 論文の概要

本論文において、論者は、保育現場で求められている保護者支援を考える上で、保育士の日常業務である「連絡帳」に着眼し、支援のツールとしての連絡帳の活用の可能性を探るべく、三つの調査を行った。一つ目は、保育士－保護者間のコミュニケーションの現状を明らかにするため、保育所に子どもを通わせる保護者を対象にしたアンケート調査である。二つ目は、連絡帳の業務実態や連絡帳業務に対する保育士の意識などを明らかにするために保育士を対象として行ったアンケート調査である。そして三つ目は、保育士が連絡帳を通じて行っている保護者支援の実態を把握するため、保育所で実際に記入されている連絡帳を対象としたデータ分析である。その上で、連絡帳が保護者支援のツールとして活用可能であることを実証し、同時に実際の活用に向けての具体的な取り組みについても提案を行った。

連絡帳を通じた保護者支援が、一部では実際に行えているにもかかわらず、現状では保育士にとって連絡帳は支援のツールという認識は希薄であり、質量ともに個人差が大きいことを明らかにした上で、保育士が保護者支援の意識をもち、連絡帳業務に当たる必要性を提示したこと、さらに今後、連絡帳業務が保育の専門性を活かした、保育士にしか行えない支援の一つとして確立をめざすために、具体的提言を行った点において、意義深い研究であるといえる。

本論文の構成は、
序章

第1章	保育士に求められる「保護者支援」「保育ソーシャルワーク」
第2章	連絡帳をツールとした保護者支援、保育ソーシャルワークの可能性
第3章	連絡帳に対する保育士の意識調査
第4章	連絡帳における保護者支援の実態調査～記述内容に関する分析を通して～
第5章	保護者支援の前提となる保育士－保護者間のコミュニケーションの現状
終章	

から成っている。以下に各章の概要について述べる。

序章では、まず研究の背景として保育士や保育所に保護者支援が求められるようになった時代背景とともに、保護者支援が保育業務においてどのように位置づけられ、変化してきたかについて概観している。それに伴い保育ソーシャルワーク概念が誕生したことや、これらの新しい役割は当初の保育士や保育所にとって戸惑いとともに受け止められ、今なお求められる役割と実践にギャップが生じていることについて、いくつかの先行研究による指摘を交えながら紹介している。さらに、そのギャップが生じる原因についても論者なりの整理・分類を試みている。

その上で、本研究の先にある結論として、「保育現場で行う保護者支援を保育士のみで担うことには限界があり、将来的には外部専門職と保育士による協働体制の構築が必要である」と考えていることが論者の研究の出発点であること、協働体制の中で、保育の専門性を活かした、保育士にしか行えない支援のあり方を模索すべきであるとしている。

そして本論に入る前に、「保護者支援」「保育ソーシャルワーク」「連絡帳」を主要なキーワードとして、その語句の説明と相互の関係性について定義づけを行っている。

第1章では、論者は「保護者支援」、「保育ソーシャルワーク」が制度的枠組みや先行研究において、どのような位置づけにあるか概観している。具体的には、第1節において、保育士や保育所が保護者支援を行う根拠となる保育所保育指針、保育所保育指針解説書において言及されている部分の整理、分析を行っている。第2節において、保育所保育指針と連動して内容が規定されている保育士養成カリキュラムにおける「保護者支援」「保育ソーシャルワーク」の位置づけやカリキュラム改正の流れを整理している。その上で、第3節では、二つの概念に関する先行研究における全体的な傾向の把握を行っている。概ね両者は共通した傾向を持ち、新たに課せられた業務や役割に対して、当初は戸惑いや混乱をもって受けとめられているが、模索するなかで次第に課題を見出し、現在は実践の蓄積に対する検証を行う研究や外部専門職導入など新たな方向性を見出す研究、さらに現在に近づくにつれ、保育の専門性を活かした支援のあり方を探る研究も見られ始めていること等、先行研究のなかで焦点化されている内容やそれらの傾向について、まとめを行っている。

第2章では、論者は連絡帳を保護者支援、保育ソーシャルワークのツールとして活用できる可能性を探るべく、第1節において保育現場における連絡帳の意義を述べ、第2節では保育士が業務を行う上で拠り所となる保育所保育指針解説書において連絡帳はどのように捉えられているかについて整理、分析を行っている。さらに第3節では連絡帳に関する

先行研究を概観することにより、時代に沿って連絡帳の意義づけが少しずつ変化、発展しつつあることを明らかにしている。まとめとして、保育所保育指針解説書において連絡帳は保護者支援の観点からも活用されることを前提としていることが確認でき、特に情報収集のツールとして活用される旨の記述があったが、論者は情報収集にとどまることなく、連絡帳の役割をさらに拡大し、保護者支援、ソーシャルワークの一部が行える可能性を持つと捉えている。

第3章では、第1節において、研究の目的として、本研究における連絡帳のように文字・文章を通じたコミュニケーション以外に、保育士－保護者間が直接的に顔を合わせて行うコミュニケーションの現状並びに二つのコミュニケーションの関係性について明らかにすることを述べ、第2節において調査の概要を述べた上で、第3節でその調査結果を分析し、第4節でまとめと考察を行っている。第3章の結論として、保護者の一部には支援ニーズがあるにもかかわらず、保育所や保育士を含めた相談先にくまなくつなげられていないことや、直接的なコミュニケーションのみでは十分と言えない状況が一部に見られることが明らかとなり、結果として、連絡帳のように文字や文章によるコミュニケーションツールも活用する必要があることが確認された。

第4章では、第1節において、研究の目的として①連絡帳の記入業務についての実態、②連絡帳に対する保育士の意識、③連絡帳の記入内容におけるソーシャルワーク機能の三つを明らかにすることを挙げ、第2節において調査の概要を述べた上で、第3節で調査結果を分析し、第4節にてまとめと考察を行っている。第4章の結論として、連絡帳はソーシャルワークのツールとして活用できる可能性が高いことが明らかであるとしている。しかし、保育士にとって連絡帳はソーシャルワークのツールであるという認識が共有できているわけではなく、今後連絡帳業務が専門職として行う業務の一つとなるには標準化、教育内容の構築が必要であること、同時に、連絡帳を通じてすべての保護者支援が担えるわけではないことも確認された。

第5章では、第1節において、研究の目的として、保育所で実際に記入されている連絡帳の記述内容を対象に、①記述文字数、②記述内容のカテゴリー分類、③保育士と保護者の応答率、④記述内容におけるソーシャルワーク的関わりの有無という四つの視点から分析することにより、保育士が連絡帳を通じて行っている保護者支援の実態把握を行うことを挙げている。第2節では、その調査の概要を述べ、第3節において調査結果を分析し、第4節でまとめと考察を行っている。第5章の結論としては、実際に保育士は連絡帳を活用して保護者支援を行っていることが確認され、前章に続き、連絡帳を用いた保護者支援は可能であることが検証された。しかし、連絡帳業務は非常に個別性に富んでおり、現段階では標準化されているとはいえないこと、連絡帳によって保護者支援の全てが担えるわけではないことも明らかとなった。さらに、保護者にとって、保育士や子育てに関する相談を行う存在であるという認識が強いことも明らかとなったとしている。

終章では、第1節において「連絡帳を活用した保護者支援の可能性に関するまとめ」と

して、第 3 章と第 4 章の二つの調査によって、連絡帳は保護者支援、保育ソーシャルワークの支援ツールとして活用であることを実証されたこと、また第 5 章の調査から保護者の一部には支援を受けたいというニーズがあるにもかかわらず、相談につながりにくい場合があること、また、保護者－保育士間には直接的なコミュニケーションが十分取れていない現状もあることが明らかにしている。続く第 2 節では、第 3 章から第 5 章までの調査を通じて総合考察を行っている。第 3 節において、「文字を媒体とする支援の限界」として、①直接的コミュニケーションにしか担えない役割、②手書き文化の衰退、③グローバル化による外国人保護者の増加の 3 点を挙げ、限界をふまえることの必要性も述べた後、第 4 節「本研究の限界と今後の課題」において、まず「本研究の限界」として、収集したデータの多寡や地域性の偏りを挙げ、さらに認定子ども園の誕生など、保育に関わる施設の多様化、また電子化など連絡帳形態の多様化への適応など、本研究では及ばなかった論文のテクニカルな限界、同時に内容的限界について述べ、「今後の課題」として 4 点を提示している。具体的には①連絡帳業務の標準化、②連絡帳による支援の体系化、③連絡帳による支援を充実させる養成・研修の充実、④保育士の意識改革である。さらに、論者は、日本においても子どもの育つ家庭が今後ますます多様化・複雑化が予想される中で、一昨年、多言語・多文化が背景にあるカナダの保育士を対象として行ったアンケート調査に触れながら、他国との比較が日本の保育士が行う保護者支援のあり方を考える上で有用であるので、今後の課題としたいと述べている。

(2) 審査結果の要旨

本論文は、今日、保育現場で求められている保護者支援が、従来の保育に加えて新たな役割として課せられたため、保育現場に戸惑いや困惑が広がっている中で、保育士にとって取り組みやすく、日常業務でもある乳児保育における「連絡帳」に着眼して、保護者支援の一つである「保育相談支援」のツールとして活用できないか、その可能性を探っているところに意欲的で、実践的な意義がある。特に、子育て支援としても課題となっている乳児保育に関する先行研究は少なく、論者の一連の調査・研究には独創性が認められる。

また、連絡帳と保育相談支援を結びつけるという新しい視点により、連絡帳を保育者と保護者間の双方向のツールと捉え、子どもの日常を見守っている保育士ならではの支援が可能になるのではと考えたところも高く評価できる。連絡帳が保育相談支援のツールであるという認識を保育士の専門性として評価するためにも、連絡帳業務の標準化を試みた本論文は今日的意義があるといえる。

さらに、保護者と毎日対面する保育士が、連絡帳をツールとして双方向に活用し、単に情報収集のツールに止まらず、保護者支援やソーシャルワークの一部として活用が可能ではないかと提唱している点や、そのための具体的取り組みに言及した点など、今日的な問題解決に大きな手掛かりを与えている点も高く評価できる。今後は、連絡帳に具体的な記入を行う上での指標づくりや、将来的に連絡帳記入に関する養成・研修内容の構築に向け

た発展が期待できる。

本論文は、以上のように、高く評価すべき独創性を豊かに備えているが、論者自身が今後の課題としたもののほかに、博士学位請求論文公開審査会において審査委員により指摘された問題点をいくつか挙げておくことにする。

第一に、先行研究となる文献を抽出する際、キーワードの設定に問題はなかったかという点である。本研究の内容と近いものであっても、当該論文のタイトルやキーワードによっては検出されない可能性もある。例えば、「保護者支援」については、保育所保育指針の改訂により、保育領域において保護者支援という概念が一般的になったが、その前は「子育て支援」という概念が先行していた。他にも「家庭」など、様々なキーワードを含めながら二重、三重に抽出することで、先行研究における真の潮流が見えたのではないかという指摘があった。

第二に、本論文が果たして「保育ソーシャルワーク」という言葉を使う必然性があったか、「保護者支援」という言葉ではなぜ難しかったのか、という質問とともに、全体的に各概念の定義づけが曖昧であるとの指摘があった。例として、保育士を対象に、連絡帳業務に関する意識調査のなかで、保育ソーシャルワークという言葉が使われていない理由について質問があった。論者からは、保育とソーシャルワークの領域では日常的に使用している言葉が異なるため、特に保育領域においてソーシャルワークで使用している概念が理解しにくいことへの配慮であった旨の説明はあったものの、保護者支援のツールとして連絡帳に関する質問項目を作成したアンケートの調査結果に対して、保育ソーシャルワークと読み替えることの可否が問われた。

第三に、各章が必ずしも有機的に構成されていないのではないかという論文構成に対する指摘があった。具体的に、本論文では連絡帳に関する二つの調査について述べた後、直接的なコミュニケーションの現状に関する検証を行っているが、最初の問いを立てる根拠としてコミュニケーションの現状を明らかにするところから始めるべきである、また論をさらに一步深めるためには、あと一章を設けて、連絡帳を用いた支援に向けての具体的提案などに言及するべきである、との提案があった。

いずれも、今後の研究において考察の幅を拓げていくための課題となろう。

以上、論文審査委員により指摘された本論文の主たる問題点を列挙した。たしかに、本論文にこれらの問題点が含まれているのは明らかである。しかし、これらは、今後の研究の進展によって早晚解決されるであろうし、課程博士論文としての価値を損なうものではない。

よって、以上の審査結果より、本論文は、博士（教育学）の授与にふさわしいと論文審査委員全員一致で判断した。